

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



CONTENTS

ごあいさつ	田上 繁	2	招聘レポート	張 青 仁	16
研究班紹介			神社と日本民衆生活	李 莉 薇	17
第1班 生活絵引編纂共同研究	ジョン・ボチャリ		二大演劇総合誌から見られる中国伝統演劇研究	福 田 忠 之	18
	小熊 誠		日中の石版画報に見る義和團事変—「風俗画報」と「図画日報」—	姚 美 玲	19
	鳥越 輝昭	3	敦煌卷子と日本奈良、平安抄本之比較		
第2班 東アジアの租界とメディア空間	大里 浩秋	5	派遣レポート		
第3班 海外神社跡地から見た景観の持続と変容	津田 良樹	6	北京師範大学への派遣調査について	張 仲 勇	20
第4班 水辺の生活環境史	安室 知	7	上海における寺院や墓地の復興と死者供養	曹 起 虎	21
第5班 非文字資料の効率的な検索と安全な流通	木下 宏揚	8	コラム		
研究エッセイ			横浜・神奈川大学日本常民文化研究所附設非文字資料研究センターに期待すること		
わたくしの研究のことなど—自己紹介を兼ねて	鳥越 輝昭	9	■ 2011年度 センター研究員・研究協力者	韓 東 洙	22
鹿児島県に残る「琉球」—僧侶の墓を中心に—	渡辺 美季	11	■ 2011年度 個人研究課題一覧	■ 2011年度 奨励研究者決定	26
碑文なき記念碑が語るマレーシアの抗日の記憶をめぐる抗争	村井 寛志	14	■ 主な研究活動		27



ごあいさつ

田上 繁 (非文字資料研究センター センター長)

非文字資料研究センターは、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」(2003 - 2007 年度)の成果を継承、発展させることを目的に 2008 年 4 月に日本常民文化研究所付置として創設されました。

21 世紀 COE プログラムは、文字に表されない人間の諸活動を資料化、体系化することにより、人類文化研究のための新地平の開拓を目指したものでしたが、その 5 年間の活動を通じて、従来の研究では必ずしも有効と認識されていなかった「非文字」という用語が、世界的にも“HIMOJI”として認知されうるほどの成果をあげることができました。本センターは、21 世紀 COE プログラムの目的をさらに進展させるために、学内外の研究者を研究員として組織し、同プログラムの研究事業の柱であった図像、身体技法、環境・景観という三つの課題を中心に共同研究を推進することになります。

すでに、3 年間 (2008 - 2010 年度) にわたる第 1 期の研究事業を成し遂げ、2011 年度より新たな第 2 期の研究事業に取り組むことになりました。第 2 期研究事業では、非文字資料研究を一層深化させるために、ヨーロッパ生活絵引編纂や、研究成果の発信に関する情報工学的研究など、5 課題 7 プロジェクトを組織し、新たな共同研究を推進することになります。

また、非文字資料研究センターは、世界各国の非文字資料関連の研究機関や研究者との交流を一段と深め、世界的なネットワークを形成して、非文字資料研究の世界的拠点となることを目指しております。現在、海外の 8 つの大学・研究機関と提携関係を結び、研究交流を積極的に進めるとともに、海外提携機関とは若手研究者の短期派遣、訪問研究員の受け入れの事業も展開し、世界的に活躍する若手研究者の育成に力を注いでおります。第 2 期では、これまでのような若手研究者への研究支援に加え、提携機関相互の研究者同士による学術交流を実現化していくことが重要な課題となります。

これら第 2 期の研究事業が成果をあげ、非文字資料研究がさらに世界的にも飛躍できますように、今後とも非文字資料研究センターへのご支援をお願いいたします。

研究班紹介

第 1 班 生活絵引編纂共同研究

田上 繁 (非文字資料研究センター長 / 総括) A ジョン・ボチャラリ; B 小熊 誠; C 鳥越 輝昭
(非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表)

生活絵引編纂共同研究の下に、①『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究を進め、21 世紀 COE プログラムと本センター第 1 期研究事業をと おして編纂、刊行した 1 巻～3 巻に続き、残りの 4 巻・5 巻を完成させる。②日本近世・近代生活絵引編纂共同研究を推進し、第一期で対象とした北海道、北陸、東海 道などの東日本の生活絵引の公刊をうけて、第 2 期で は西日本の沖縄を中心とした『南島編』の編纂共同研究 に着手する。③ヨーロッパ生活絵引編纂共同研究に新た に取り組み、絵引編纂という手法が東アジアのみならず、 ヨーロッパにおいても有効であるか試作本を編纂して検 証する。これら三つの共同研究を組織し、「絵引」とい う世界的に類例のない図像資料の情報化方式を推進し、 絵引の編纂をと おして非文字資料研究センターが世界的 な研究拠点となることを目指す。

A 『マルチ言語版絵巻物による日本常 民生活絵引』編纂共同研究

過去に描かれた図像から情報を引き出し、「発信する 絵引」ともいべき方式を考案した『絵巻物による日本 常民生活絵引』全 5 巻は、刊行されて半世紀余が経過 した現在もなお、日本史研究上の必須の工具書として活 用されている。

私どもは、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人 類文化研究のための非文字資料の体系化」(2003～ 2007 年度)において、同書に描かれた事物の名称 (キ ャプション) を英語・中国語・韓国語に訳するとともに、 絵引に付された解説文を英語訳し、『マルチ言語版絵引』 *Multilingual Version of Pictopedia* として編集・刊 行する事業に取り組んできた。このプロジェクトをと おして、日本以外にはあまり知られてこなかった「絵引」を、 世界的に利用可能な図像資料にするとともに、世界に類

のない「絵引」という図像の編纂・活用方式を世界に提 示し、世界的な共通方式にすることを旨としたのである。 『マルチ言語版絵引』(本文編)は、『絵巻物による日本 常民生活絵引』英文版としての性格を、また『語彙編』は、 英語・日本語・中国語・韓国語の各言語から同書を読み、 かつ比較対照的に利用できる資料集の役割を有する。

2008 年度に発足した非文字資料研究センターの共同 研究は、『マルチ言語版絵引』全 5 巻のうち Vol.1/ Vol.2 を世に問うた 21 世紀 COE の事業を継承するも のであり、その第一期共同研究の成果として、2011 年 3 月に Vol.3 を刊行した。2011 年度から開始する第二 期共同研究の目的は、上記 3 巻の編集実績を前提として、 これまでと同じく若手研究者を起用し、次世代の育成を 視野に入れながら、完訳版全 5 巻を刊行することである。

私どもは、海外の歴史学・民俗学・人類学・文学など 様々な分野の研究者にとって、『マルチ言語版絵引』が 日本の生活文化研究の有力な参考資料となることを期待 している。同時に、本書に対する第三者の評価、全 5 巻の翻訳語彙の再精査と累積編集、「絵引」英語訳の電 子出版など『マルチ言語版絵引』固有の課題とともに、 2011 年度から開始する新たな「生活絵引」編纂グルー プとの共同研究の推進という課題もあり、これらの研究 課題への取り組みによって、生活絵引研究の新たな局面 を切り開きたい。

B 『日本近世生活絵引』南島編編纂 共同研究

本研究班は、近世琉球地域における風俗絵図を対象と して生活絵引を合同で研究し、その編纂を進める。研究 対象は、琉球列島の北部、首里・那覇、南部の 3 地域 とし、それに対応させて「琉球眞景集」、「琉球進貢船図 屏風」と「近世琉球風俗絵図」、「八重山蔵元絵師画稿集」

を予定している。

「琉球眞景」は、18世紀から19世紀前半にかけての『南島雑話』以前の奄美における生活習俗が描かれている。それは、11景で構成された巻物で、製糖風景、輪踊り（八月踊り）、相撲、船こぎ競争などが描かれ、当時の奄美の生活がよくうかがえる。

「琉球進貢船図屏風」は京都大学総合博物館蔵であるが、その他に沖縄県立博物館蔵の「首里那覇港図」や滋賀大学所蔵の「琉球貿易図屏風」、浦添美術館蔵の「琉球交易港図」など数多くある。それらは、近世の那覇港の賑わいを描いているが、進貢船や薩摩船の他にもサバニなども描かれ、さらに船に乗る人々や陸にいる人々などの中で描かれた近世首里、那覇における民衆の風俗をうかがい知ることができる。また、明治以降に出された查丕烈「琉球風俗絵図」は、按司の婦子、士族の妻子、商売をする婦人、子豚を売る民、糸満の漁業民など10の画題について描かれている。髪型や衣服、持ち物など琉球王国末期から明治中期ころまでの沖縄の風俗を知ることができる。

さらに、「八重山蔵元絵師画稿集」から八重山の人々の生活を調べていきたい。この画稿集は、琉球王府時代に八重山の政庁であった蔵元に所属していた絵師によって描かれたもので、八重山の祭りや農作業、布の製作工程などが描かれ、114点が残されている。描かれたのは明治中期と考えられるが、沖縄は明治12（1879）年に琉球処分によって日本に併合された後もしばらくは旧慣温存政策がとられ、琉球処分以後に描かれたといってもそこに描かれている民衆の生活にはそれ以前の慣習が残されている。近世期の八重山の生活を知る上で、貴重な画集だと考えられる。

初年度の2011年度は、「八重山蔵元絵師画稿集」を取り上げる。研究班の班員と共同研究者が中心となって研究と編集作業を進めるが、石垣出身のこの絵図に詳しい方々にも参加していただき、地元方言をきちんと押さえながら作業を進める。初年度の作業結果を基礎としながら、引き続き首里・那覇そして奄美へと北上していく予定である。

C『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究

『ヨーロッパ近代生活絵引』班は、今期が終了する2013年度末に、「18世紀ヨーロッパの生活絵引」の第1巻の出版を目指している。「ヨーロッパ」は、この場合、仏・独・伊・英語圏を指しており、「18世紀」の下限は、フランス大革命以前までである。生活絵引の資料とするのは、他の班とおなじく、同時代に描かれた、実写を目指した風俗画である。ただし、〈風俗が描き込まれている絵〉という広義の風俗画も資料に含めることになるかもしれない。ヨーロッパ文化は都市を中心に発展してきたから、資料としては、基本的に都市民の生活が描かれたものを取り上げることになるだろう。資料の分析と解説にあたっては、社会史的な視角に比較文化的視角を加味することになるだろう。18世紀については、次期にもう1巻を出版して計2巻とする計画である。

『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂を18世紀から出発する理由は、（風俗画の始まり自体はそれ以前のネーデルランドであったにしても）ヨーロッパの広域で風俗画が描かれるようになったのは18世紀からだからである。これは、フランスのジャン＝バティスト・シャルダン、イタリアのジャンドメニコ・ティエポロ、イギリスのウィリアム・ホガースがすぐに頭に思い浮かぶ世紀である。なお、将来的には、19世紀についての生活絵引3巻ほどを出版し、最後にネーデルランドに関する絵引を出版したいと思っている。

当班は、資料の蓄積のない零からの出発であるから、今年度は、(1) 基本資料の収集・所在確認・選別、(2) 関連資料の収集と検討、を目標とした。

当班は、研究員として、フランス文化・文学専攻で、祝祭・スペクタクル・舞台芸術・社会思想に造詣の深い熊谷謙介氏、ドイツ語圏の美学・前衛芸術思想専攻で視覚文化に造詣の深い小松原由理氏、という新進気鋭の研究者ふたりに、比較文学・比較文化史専攻の鳥越輝昭が加わるかたちで出発する。熊谷が仏語圏、小松原が独語圏、鳥越が伊語・英語圏と全体のまとめ役を担当して、「ヨーロッパ」をカバーする計画である。

研究班紹介

第2班 東アジアの租界とメディア空間

大里 浩秋（非文字資料研究センター研究員／研究班代表）

第1期の「中国・韓国における旧日本租界」研究班の活動をふり返ると、シンポジウム（公開研究会）を3回開き、中国・韓国の研究者の参加を得て、旧租界の歴史や現状に関心を持つ人たちの前でこれまで続けてきた共同研究の成果を報告し、各自の租界に関する研究の中間報告を行った（詳細は本誌No.22、23、25を参照のこと）。それは、私たち非文字資料研究センターが目ざす世界に向けた情報の発信や研究交流拡大にとって大いに意義のあることであったが、その一方で、1年に1、2回のシンポジウムを開きその機会に論文をまとめるのが主たる活動となり、日常的な取り組み、資料収集と分析およびその活動を基礎にした研究会を開き、同様の関心を持つ研究者の報告やあるいは租界に住んだことのある人の体験を話してもらう会を開くことなど、COE時期には一部であれ行った活動がほぼできなかったことは反省材料である。

第2期には、従来の租界研究を継続しつつ、租界が存在した同時期に中国・朝鮮で出版された日本語の新聞・雑誌を取り上げて、現地で形成された日本人のメディア空間の実態を明らかにし、そうすることで一層日本が租界や租借地を運営した歴史や実情を知りたいと考えて、「東アジアの租界とメディア空間」と題する研究班を発足させたが、上記第1期の反省材料を忘れず、日常的な活動を積み重ねたいと考えている。

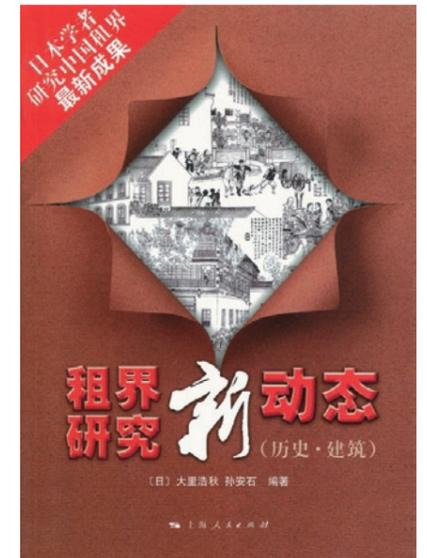
具体的には、関連資料の収集に努めながらその整理と読み合わせを行い、外部の研究者を招いての研究会を適宜開くこと、さらに、年に1、2回中国か韓国、および本学でシンポジウムを開き、その成果を公刊する。

以下、班のメンバーで取り組みたいと考えている課題を列記するならば、次のようになる。

・戦前の中国・朝鮮・日本に設置された租界（租借地・

鉄道附属地を含む）、居留地の比較研究
 ・租界・居留地で発行された新聞・雑誌の研究
 ・租界で発行された画報や新聞、良友画報、北洋画報、キング、大陸新報、大東亜画報等に掲載されている図像資料の比較検討
 ・租界に代表されるモダン都市文化の研究

なお、第1期には数年来発表した論文をまとめて『中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産』（神奈川大学人文学叢書27、御茶の水書房、2010年3月）を出版し、2011年春には、上記の本と2006年に出した『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』から数篇を選んで中国語に訳して、上海人民出版社から『租界研究新動態（歴史・建築）』と題する本を出版することができた（下に載せたのは、その表紙部分）が、第2期では着実に共同研究を展開することでこれらに続く成果報告書を公刊できればと考えている。





研究班紹介

第3班 海外神社跡地から見た景観の持続と変容

津田 良樹 (非文字資料研究センター研究員／研究班代表)

戦前期において大日本帝国が海外において植民地化した旧台湾・旧朝鮮・旧樺太・旧南洋群島や旧満洲国を中心に中国などの侵略地に日本人は神社を創設した。それらが海外神社であり、その数は2000箇所にもものぼるといわれている。敗戦とともにほとんどの神社は現地人によって、また日本人(軍)自身の手によって破却され、その機能はすべての神社で停止した。

われわれは、神奈川大学21世紀COEプログラムの共同研究のひとつとして、「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」のなかで、海外神社跡地の景観変容に取り組んだ。その成果の一部として「海外神社(跡地)調査データベース」を構築し、Web上に公開した。非文字資料研究センターに移行してからも、毎年このデータベースの増補改訂を続けている。さらに、このデータベースの成果を基盤として、在野の研究者なども含めた「海外神社研究会」を発足させた。

本共同研究は、この「海外神社研究会」を母体として、戦後60数年を経た海外神社(跡地)を景観の持続と変容の観点から分析・検討するものである。すなわち、海外神社跡地の現地調査を実施し、各神社の神社創設以前の状況、神社時代の様相、戦後の跡地の持続と変容についての実態解明することを目的としている。

現在までに、神社跡地の景観変容はほぼ4類型に分けられるのではないかと考えている。それらは、①「改変」型、極めて類例が多く、公園(朝鮮神宮・樺太神社)・ホテル(台湾神宮)・宗教施設(南洋群島の和泉神社)・忠烈祠(台湾護国神社)・学校施設(新京神社)などに改変されている場合である。②「放置」型、すなわち荒れるがままに放置され原野・雑木林になっている場合。なお、建国忠霊廟のようにほぼ旧状を維持している場合もある。③「再建」型、少数ながら新たな神社として再

建されている場合。④「復活」型すなわち神社が創建される以前の施設に戻った場合などが確認されている。また、それら海外神社跡地の変容の要因についても、戦後の政治体制による政治的要因。その地域の政治体制の転換や日本との関係の変化による要因。その地域の開発の度合い、経済発展の度合いなどによる要因。その地域の伝統文化の違いによる要因。さらには支配者交代を強く印象付け「刻印」するという要因などが考えられている。

以上のような、現在までの数少ない調査事例からの仮説を、多くの現地調査を実施することによって検証・修正するとともに、今なお、必ずしも実態がよくわかっていない海外神社の全貌を明らかにしたいと考えている。

いずれにせよ、台湾・韓国・サハリンなどの現地調査を実施し、神社創建以前の状況、神社時代の様相、戦後神社跡地の持続・変容などの実態を解明することのなかから、海外神社研究の総括が見えてくるのではないかと期待している。

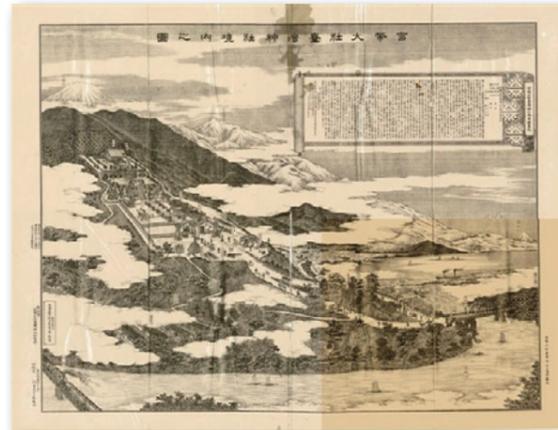


図1 「官幣大社臺灣神社境内之圖」
基隆川に架かる明治橋から本殿に至る神社の全貌を鳥瞰パースで描く。右上部に神社の「由緒略記」が記されている。明治39年6月17日発行、大正11年1月20日増補再版。(辻子コレクション)

研究班紹介

第4班 水辺の生活環境史

安室 知 (非文字資料研究センター研究員／研究班代表)

本共同研究は、多くの人が行き交い都市として発展するところが見られる一方で、低湿で塩害を受けやすいがため遅れた農業地とされてきた大河川の河口部に広がる汽水域に注目し、そうした水辺環境を生活の場とする人々の生活文化について環境史の視点から究明することを目的とする。同時に、非文字資料の研究手法として、オーラルヒストリーおよび生活環境史を開拓する。具体的には、以下に示す2つのテーマから上記の問題に迫ることとする。

①水上生活者の歴史の変容

江戸時代、日本列島には陸に家を持たずに水上で暮らす「家船」という生活形態があった。近代に入っても、さまざまにその様態を変えながら水上生活者は各地に存在した。しかし、近現代における水上生活者に関する研究はほとんど進んでいないのが現状である。今その痕跡は歴史に埋もれようとしており、その記録化は緊急性を持つ。

具体的な研究対象地として、北九州の洞海湾を取りあげ、八幡製鉄所の発展に伴う石炭輸送の担い手として登場した水上生活者の歴史的な推移と、洞海湾の環境・景観の変化を重ねて追究する。また、そうした水上生活の変容と消滅のプロセスは、日本における近代化の歴史とその問題点を写し出す鏡でもある。その意味では、本研究は水上生活者を通して日本の近代化を問い直すことにもなる。

なお、現地調査においては、残り少ない水上生活体験者へのインタビューとともに近代に撮影された写真・映像資料の収集を通して、オーラルヒストリーの手法による水上生活の記録化とその分析をおこなう。

②汽水域の民俗文化

かつて日本常民文化研究所の河岡武春は、日本海沿岸

にある潟湖周辺の暮らしぶりに着目し「低湿地文化」を発想した。その検証は未完のまま終わったが、低湿地文化のあり方として高い複合生業への志向性を暗示した。潟湖周辺の環境は、海と陸の接点となる汽水域(海水と淡水の入り混じるところ)という特徴があり、じつは河岡のいう低湿地文化とは汽水文化の一面に過ぎないのではないかと考えられる。

四方を海に囲まれる日本列島の場合、河口部や潟湖・内湖といった沿岸環境の多くは汽水域となるが、そこはたとえば魚類の生息環境としてみた場合、淡水魚とともに海水魚も生息可能な生物多様性の高い空間である。そうした自然的特徴を背景に、汽水域では独特な漁労技術や低湿地農耕が発達する。さらには、歴史的に見て、そこは海から河川への荷の積み替えがなされるなど交通の要地となる。また、そこは市や行商といった商業活動も盛んになり、港町のように都市化する場合もみられる。そのため、当然、人や物の行き来に伴い、噂や世間話といった情報の集積地ともなっていた。こうした個々の文化要素を繋ぎ合わせることで、河岡の低湿地文化論を批判的に継承し、新たな視点に立った生活環境史研究として「汽水文化」を提唱する。



写真1 筑後川下流のクリーク(福岡県柳川市)

研究班紹介

第5班 非文字資料の効率的な検索と安全な流通

木下 宏揚 (非文字資料研究センター研究員/研究班代表)

1. まえがき

21世紀COEプログラムの4班「地域統合情報発信」のデータベース関連の研究成果を引き継ぐ形で、今年度よりスタートした共同研究班、第5班『非文字資料の効率的な検索と安全な流通』について紹介する。本共同研究は、非文字資料を研究者間および専門家以外の人との間で情報の提供、共有などを行うために必要な基盤技術を構築し、実際の資料や研究者などを対象とした実証システムにより、その有効性を検証することを目的とする。上記の目的達成に必要な基盤技術の提案を行い、その後、只見カードを対象に基本的なシステムを構築する。

2. 実施計画の概要

計画している主な研究テーマには、以下のものがある。
 (1) 非文字資料に特化したオントロジーを構築し精度の高い検索と新しい知見のマイニングを行うシステムを構築する。
 (2) 非文字資料のオントロジー構築、検索などに適したユーザインタフェースを構築する。
 (3) 非文字資料の検索、流通時に個人情報や機密情報を保護し、著作権の調停を自律的に行う流通システムを構築する。
 (4) 非文字資料の資料の作成、データ処理、資料の流通などを円滑に行うために地域通貨的決済手法を提案する。
 (5) 非文字資料とことば工学のコラボレーションおよび非文字資料からの会話文生成システムの提案を行う。

次に現在進行中の主なテーマを紹介する。

3. オリジナルオントロジーを用いた民具のデータベース化

本研究が対象とする非文字資料は民俗文化をベースとしている。そのため同じ対象を指し示す場合でも、地域や年代によって表現に相違が生じる。したがって、非文字資料の情報共有・情報流通には情報資源に関する情報、

すなわち、メタデータを用いた意味情報検索が求められる。本研究では民俗資料の一つである民具を例にとり、民具データベースにオントロジーを導入することによる有効性を示していく。図1に民具名と使用目的について構築を行ったオントロジーを示す。

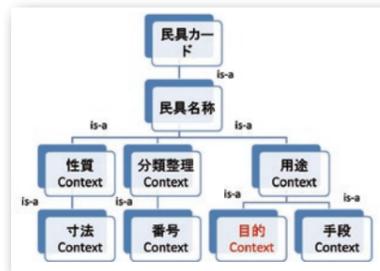


図1 民具名と使用目的のオントロジー

すなわち、メタデータを用いた意味情報検索が求められる。本研究では民俗資料の一つである民具を例にとり、民具データベースにオントロジーを導入することによる有効性を示していく。図1に民具名と使用目的について構築を行ったオントロジーを示す。

3. 「善く見える」ファイルシステム

マルチエージェントを応用した自己組織化されたコンピュータやタブレット端末の情報インタフェースを提案する。ネットワーク上に散らばっている様々な情報リソースを、自動的に分類・整理し、デスクトップのアイコンのような形で表示・操作することで、人とコンピュータを連携させ、人の創発を刺激、支援するシステムを提案する。

4. 多様な価値観を反映できる価値交換のためのシステム

研究資料の提供や研究を進めていくための作業を円滑に進めるために、多様な価値観を反映可能な価値交換システムを提案する。このような用途に適したものに地域通貨があるが、本来反映されるべき多様な価値を単一的な金銭的価値などに置き換えているために十分に機能しない。そこで、多様な価値をベクトルとして表現し、価値観の評価には人間関係マップに基づく評価関数を導入する。このシステムにより非文字資料の収集や体系だった意味付けなどの作業をより効率的に進めることが可能となる。



わたくしの研究のことなど—— 自己紹介を兼ねて

鳥越 輝昭 (非文字資料研究センター 研究員)

はじめまして。非文字資料研究センターにお迎えくださったことを心より感謝いたします。研究生生活をしたために大学教員の仕事を選んだ者として、純粋な研究機関に仕事を与えられたことは無上の喜びです。この新しい場で、浅学非才の身にできるかぎりの貢献をしたいと考えています。このニュースレターに執筆するのは初めてですから、自己紹介を兼ねて、わたくしの関心のありかた、研究の概要、そして、これからどのような貢献ができそうであるか、について書いておきたいと思います。

わたくしは生来寡黙なので、どういう研究をしているのかと問われたときには、簡単に「比較文学と比較文化史のようなものを少し研究しています」と答えることにしています。さらに問われると、「イタリアの都市ヴェネツィアをめぐる表象の歴史を中心に研究しています」と答えます。そして、「たとえば、トーマス・マンの小説『ヴェニスに死す』やヴィスコンティの映画『ベニスに死す』のなかで、ヴェネツィアがどのようなイメージで描き出されたり、どのような役割を果たしているかを調べています」と答えます。たいていはこれくらいの説明で満足してくださることが多いので、別の話題に移ってゆきます。しかし、このニュースレターを今お読みの

方は、ひょっとするともう少し関心を持たれるかもしれませんが、少し詳しく書いてみます。

図版をご覧ください。図1は、ヴェネツィア人画家カナレットが描いた『ヴェネツィアのスカヴァォーニ河岸の光景』(1730年代晩期)という絵で、図2は、英国人画家ターナーが描いた『ヴェネツィアのためいきの橋』(1840)という絵です。ふたつの絵は、どちらも、都市ヴェネツィアのいわば正面玄関あたりを、似た角度から描いていますが、大きな違いがあります。ターナーの絵では中央に描かれ画題にもされている「ためいきの橋」が、カナレットの絵では無視されているのです。カナレットは、英国人グランドツーリストたちに、ヴェネツィアの名所を描いた絵を売って大成功した画家でしたから、仮に「ためいきの橋」が名所であったのなら、かならず描き込んだに違いありません。この橋は、1600年代の初めに、新設された監獄(ターナーの絵のなかで橋の右側に描かれている建物)と統領宮殿(橋の左側に描かれている建物)とを運河越しに繋ぐために架けられたものでしたが、じつは、長い間名所ではなく、「ためいきの橋」という呼び名もありませんでした。この橋が目され、「ためいきの橋」と呼び習わされるようになるのは、橋



図1* カナレット『ヴェネツィアのスカヴァォーニ河岸の光景』(1730年代晩期)



図2** ターナー『ヴェネツィアのためいきの橋』(1840)

が出来てから 200 年ものちの、1790 年前後のことです。

「ためいきの橋」という名は、統領宮殿（独立国家だったころのヴェネツィアの元首公邸・議事堂・裁判所を兼ねた建物）のなかの裁判所で死刑の判決をうけた罪人が、監獄に連れて行かれるときに、二度と生きてこの橋を渡ることはないという思いから「ためいき」をついただろう、という想像から生まれた呼称です。この橋が注目されるようになった原因は三つあります。ひとつの原因は、この橋が、かつてのヴェネツィアでおこなわれていた貴族寡頭政治を象徴するものとなったからです。新監獄は、それまでの監獄では数が足りなくなったために新設されたものなので、政治体制が警察国家的なものに変質した現れであったのですが、そのことには 200 年近く関心はもたれませんでした。関心は、アンシャンレジムへの憎悪から生まれたのです。この橋が目されるようになった第二の原因は、運河脇の暗い地下牢に魅せられるような病的な想像力です。つまり、「ためいきの橋」の吸引力は、大きく見れば、ヨーロッパのなかの啓蒙思想からフランス革命へと進んだ精神風土、そしてまたロマン主義の精神風土のなかで生まれています。

さらに、「ためいきの橋」の吸引力には、第三の直接的原因、英国の詩人パイロンが関係しています。パイロンは、フランス革命後の精神的動揺と自由主義的ロマン主義とを一身に体現した、汎ヨーロッパ的スターでした。この有名人が、注目の連作詩（『チャイルド・ハロルドの巡礼、第 4 部』1817）の冒頭で、「わたしは、ヴェネツィアの『ためいきの橋』の上に立った。宮殿があり、両端は監獄だった」と書いたので、この橋はヨーロッパ全体で注目されるようになりました。ターナーの描いた『ためいきの橋』も、パイロンのこの詩行に基づいており、出展の際にはそれを引用していたのです。

以上はわたくしの研究内容のごく小さな例ですが、わたくしの研究の特徴はたぶん三つあります。第一に、地域的に、国民国家・国民文化の枠組みによらず、ヨーロッパという枠組みで考え、時代的に、中世から 20 世紀までのパースペクティブで考えようとしている点です。第二に、研究対象を、文学作品、旅行記、絵画、建築物、オペラ・演劇・映画の DVD 資料と台本など、文字・非文字を問わず雑多な資料に求めていることです。第三に、究極の関心が精神的で、なおかつ、日本のなかでは例外的な視角を持っていることです。

20 年前に F・パウマー『近現代ヨーロッパの思想—その全体像』というかなり厚い（800 頁ほどの）訳

書を出版したことがあります。これは、17 世紀から 20 世紀半ばまでのヨーロッパ思想の潮流をたどった良書で、翻訳しながらいぶん勉強になったのですが、じつは、その翻訳作業と前後して発見した本に、オーストリアの精神史家フリードリッヒ・ヘーアの『ヨーロッパ精神史』という大著があります。著者自身が原著の内容を数分の一に縮約した版が邦訳されていますが、原著自体の邦訳は残念ながらありません。ドイツ語は、わたくしには英・仏・伊語につぐ第四外国語でしかありませんので、この精神史を翻訳するようなことはないだろうと思います。しかし、この書は、長らく、わたくしには最も共鳴するところの多い、汲めども尽きぬ泉のような存在です。

ヘーアは、紀元 2 世紀から 20 世紀までのヨーロッパについて、思想家たちはむろんのこと、さまざまな社会事象・文化事象の根底にある精神形態を、博識と洞察力とを駆使しながらあぶり出し、精神形態の持続と影響関係とを描き出してゆきます。ヘーアは青年期に反ナチ闘争をした体験があり、それが思考と研究の原点にある様子なのですが、たとえばヒトラーを、ヘーアは、オーストリアの山奥で迫害から生き延びた再洗礼派・熱心派キリスト教の精神を受け継ぎ、下層から憎悪の眼で捉えたバロックの神聖ローマ帝国を再興しようとした人物として描き出します。ヘーアの『ヨーロッパ精神史』はヨーロッパ精神の根底を露わにする好著なのですが、日本ではほとんど読まれてこなかったようです。その原因は、ヘーアの立場がローマ・カトリックのなかの、とりわけ理性と人文学的教養と批判とを大切にきたリベラル派であるため、知識人の多くが没キリスト教、もしくは反キリスト教、もしくは反ローマ・カトリックである日本では受け入れられにくかったからでしょう。そのような書を好むわたくしは日本では少数派に属します。そして、わたくしもまた、ヘーアと同じく、たとえばヴェネツィアをめぐる表象の背後にある精神形態とその動きとを捉えようとしています。ですから、わたくしの研究内容をほんとうに正確に記述するなら、「ヴェネツィアなどをめぐる表象の背後にある精神形態の歴史的研究」とでもなるでしょう。

ともあれ、こういう関心と研究経験とを背景にして、わたくしは、非文字資料研究センターの今後の研究に、浅学なりに、貢献できることがあるだろうと思っています。それは、第一に、非文字資料をふくむ多様な資料の分析経験、特に文字資料との関連づけ。第二に、ヨーロ

ッパ文化史全体への目配り。そして第三に、日本では珍しいローマ・カトリック的な視野、というところでしょうか。たとえば、キリスト教的主題を伏在させる絵画を資料にすることになっても、あまり見当外れな分析はしないだろうということです。

*Giovanni Antonio Canal, called Canaletto (Italian

(Venice), 1697-1768), *View of the Riva degli Schiavoni, Venice*, late 1730s, oil on canvas, 18 1/2 × 24 7/8 in. (47.1 × 63.3cm.). Toledo Museum of Art (Toledo, Ohio), Purchased with funds from the Libbey Endowment, Gift of Edward Drummond Libbey, 1951.404 Photo Credit: Image Source, Toledo.

**Joseph Mallord William Turner, 1775-1851, *Venice, the Bridge of Sighs*, exhibited 1840, oil on canvas, 686 × 914 mm. Accepted by the nation as part of the Turner Bequest 1856. Digital Image Credit: Tate, London.



鹿児島県に残る「琉球」 —僧侶の墓を中心に—

渡辺 美季（非文字資料研究センター 研究員）

1. 加世田の琉球漆器

2005 年 11 月 25 日、私は何名かの研究者と鹿児島県南さつま市にある加世田郷土資料館を見学していた。加世田とゆかりの深い戦国大名・島津忠良（日新公、1497～1568 年）の遺品を展示するコーナーにさしかかった時、横にいた琉球史研究者の上里隆史氏が「日新公の御鉢子」とされる漆器を指して「これ古琉球の漆器じゃないですか?」と言った。古琉球とは、琉球王国の前半期——王国が形成され始める 12 世紀頃から、1609 年の島津氏の琉球侵攻によって琉球が日本の支配下に入るまで——の時期を指す。後半期である近世琉球——1609 年から 1879 年の琉球処分によって王国が終焉を迎えるまで——の漆器であるならまだしも、それ以前のもので、しかも琉球の漆器と気づかれずに残っているなんて、そんなことがあるのだろうかと思半信半疑だったが、果たして後日専門家による本格的な調査が行われ、古琉球後期の琉球漆器の入子碗であることが確認された(安里進「仙台と薩摩に伝世した琉球漆器の祭具」『漆工史』29、2006)。私は鹿児島に残る琉球の貴重な遺物の「発見」現場に立ち会ってしまったことになる。

鹿児島（薩摩）は古来より地理・経済・政治的に琉球

王国と関わりの深い地域であり、今も様々な琉球の「痕跡」が残っている。その中にはすでによく知られているものもあるが、一方で先の漆器のように全く琉球のものと気づかれずに「残っている」ものもある。それらは琉球人の活動や、琉球と鹿児島との交流に関する極めてリアルで貴重な情報を発信してくれる資料（史料）である。近世琉球の国際関係史を主に研究する私は、2005 年頃——つまり漆器「発見」事件の前後——から薩琉交流の諸相に関心を持つようになり、毎年他の研究者と協力し



図 1 参考地図



写真1 年行寺跡の琉球僧墓

ながら鹿児島各地に残る琉球の「痕跡」の調査を行ってきた。まだまだ全容はつかめておらず、調査が進めば進むほど分からないことが増えていくという状況だが、この場を借りてその成果の一端として琉球僧の墓を幾つか紹介してみたい。

2. 永野の琉球人墓

琉球と薩摩の交流は海路を通じて行われたため、琉球の「痕跡」は沿海部に多い。しかし数は少ないものの、内陸にも重要な「痕跡」が見出せることがある。その一つが、川内川上流の山間部に位置するさつま町永野の琉球僧墓である。ここにはかつて年(念)行寺という臨済宗の寺院があった。記録によれば琉球人の玄超禪師が中興し、それ以後、琉球僧が五代も続けて住持となったという(『三国名勝図会』巻42)。現在はその墓地だけが残るが——鹿児島では廃仏毀釈により寺院の大半が破壊された——、そこに三基の琉球僧の墓が残っている(写真1)。以下は、薩摩町郷土誌編さん委員会編『薩摩町郷土誌』(薩摩町、1998)の記事に肉眼観察の成果を反映した墓碑の文面である。

- ① (左端)：[正面] 琉球国伍徳□勝林徒／[背面・右] 享保十四(1729)己酉九月二十一日□／[背面・左] □□□□□□和尚之塔
- ② (中央)：[正面] 琉球僧仙江院徒也／[背面・右] 宝暦六(1756)年丙子九月二十九日／[背面・左] 前住當院妙心第一座九知牛和尚立焉自弟子中
- ③ (右端)：[正面] 琉球僧□岸軒徒／[背面・右] 寛保三(1743)癸亥四月十九日／[背面・左] 前住雪峯知電俊板□塔

また近くの泉福寺(浄土真宗本願寺派、1872年創建)



写真2 明山寺跡の観音像

には、年行寺の遺物として「釈迦涅槃図」が伝わっている。年に一度しか一般公開されないため未だ実見できていないが、その裏には1760(宝暦10)年の補修について施主10名および表具師の名前が記されており、施主の筆頭は「琉僧智燦(燦カ?)」で智燦は「当仮住」であったという(『薩摩町郷土誌』)。さらに、さつま町広瀬の南方神社には「金山安養院琉球僧」云々と記された年行寺の棟札が保存されているそうだが(『薩摩町郷土誌』)、これも実見に至っていない。

3. 大隅半島の琉球人墓

ところでなぜこの寺に琉球僧がいたのだろうか。その鍵となるのは、遙か離れた大隅半島の東側にある志布志の名刹・大慈寺(臨済宗)である。近世の琉球僧侶はしばしば薩摩藩領へ参禅したが¹、大慈寺は琉球から参禅する臨済僧の拠点となった寺院であった(藤田励夫「大慈寺と対外交流」『京都妙心寺—禅の至宝と九州・琉球—』西日本新聞社、2010)。そして永野の年行寺は、この大慈寺の末寺・広徳寺(曾木)の末寺であったのである。年行寺に琉球僧がやってきたのは、多分大慈寺のネットワークによるものであったのだろう。但し年行寺の琉球僧の素性や、現地における彼らの生活の様子、五代連続で琉球僧が住持となった理由などについては、関連史料がなく皆目分らない。

1 古琉球期には日本各地へ参禅したが、近世前半に段階的に薩摩領内から出ることが禁止され、1731年に滞在期間の上限が15年と定められた(深澤秋人「遍参僧に関する覚書」『史料編纂室紀要』23、2008)。
2 大慈寺の什器目録(1953年7月)には「即心院龍翔寺琉球末派等古文書数通」とある。

なお大隅半島には大慈寺に二基、その末寺の道隆寺跡(高山)に一基の琉球僧墓が残されている(小野まさ子「資料紹介」『地域と文化』57、1990、同「道隆寺にある琉球僧の墓」『浦添市立図書館紀要』3、1991)。また高山からほど近い東串良町唐仁の明山寺跡には、琉球僧・越山なる人物が建立した観音像が残っている(写真2)。台座の部分に「正月十八日／琉球国／越山建立／正五九月式日／文化十五(1818)年戊寅／町中安全／正観音／村裡吉祥」とある。明山寺は曹洞宗で高山瑞光院の末寺であった。

4. 国分の琉球人墓

一方、鹿児島湾に面した霧島市国分湊の中福良には琉球人の住持墓(写真3)が残る。墓碑には「文化八(1811)年三月十五日／富寺前住大慈端堂惠發西[癸要カ?]堂和尚／琉球國中山府那覇邑／龍翔院我翁從」とある。龍翔院とはここにかつてあった寺院である。その詳細は不明だが、大慈寺の末寺である可能性がある²。

同じく国分広瀬の小村には、国分宮内の正興寺(建仁寺の末)の末寺であった日輪山東光院(臨済宗)の琉球僧墓三基(写真4・5)がある。墓碑は以下の通りである。

- ① 琉球僧墓／得海祖盛智蔵禪師／元禄八(1695)乙亥十月初二日
 - ② 前正興當院開山星淑大和尚／琉球禪隆建立之／元禄九(1696)丙子天拾月吉日
 - ③ 琉球僧墓／前正興當院十二世全岑／享保十一(1726)丙午年十一月廿七日
- 僧侶らの素性は不明だが、東光院は、この地の船頭・



写真3 龍翔院跡の琉球僧墓



写真4 東光院跡の琉球僧墓①



写真5 東光院跡の琉球僧墓②(左から2つ目)、③(右から2つ目)

堀切彦兵衛が琉球侵攻の船頭を命ぜられた際に海上安全と島津軍の勝利を祈って願を掛け、成就したために再興されたといわれており(『国分諸古記』)、琉球と関わり深い寺院であったようである。

一方、18世紀末に国分を訪れた医師・橘南谿によれば宮内一東光院の本寺の所在地には明王寺という山寺があり「住持の僧は琉球国の人」だったという(『西遊記補遺』)。明王寺は不詳だが、国分における琉球僧の様子が僅かなりとも確認できる貴重な事例である。

近世期には琉球・薩摩の双方において国をまたぐ移住・通婚が厳しく制限され、両地域の交流は一時滞在者の往来に限定されていた(渡辺美季「境界を越える人々—近世琉薩交流の一側面—」井上徹編『海域交流と政治権力の対応』汲古書院、2011)。こうした状況の中で、薩摩に参禅した琉球僧は十数年にわたる長期滞在を認められた稀有な存在であった。彼らはどのように現地社会と関わっていたのだろうか。また琉球との関係はどのように維持されていたのだろうか。まだまだ様々な課題が残されている。私の鹿児島通いは当分続くことになるだろう。

※なおここに紹介した史跡を含め、調査の成果の多くは下記のサイトで公開している。

日本における琉球史跡 http://www.geocities.jp/ryukyu_history/Japan_Ryukyu/Main.html

【付記】鹿児島調査の際には毎回多くの方のご支援をいただき、本稿に関してはとりわけ次の方々にご多大のご協力とご教示をいただきました。特に記して深謝申し上げます。

石田恵一氏・上原兼善氏・重久淳一氏・黒木國泰氏・橋口亘氏

碑文なき記念碑が語るマレーシアの抗日の記憶をめぐる抗争

村井 寛志 (非文字資料研究センター 研究員)

多民族国家であるマレーシアでは、マレー人を中心とするブミプトラが全人口の66%を占めるが、中国からの移民の子孫である華人も26%を占めている。隣国のシンガポールがやはり多くの華人人口を抱えながら(76%)、周辺国に配慮した英語中心政策によって中国語(華語)の公式な使用が抑えられてきたのとは対照的に、マレーシアの華人コミュニティにおいては、ある種の自治が認められ、中国語による教育や、中国語のマスメディアが受容されている。

こうした中国語の通用性に助けられ、筆者はここ数年、マレーシア農村部における華人コミュニティの現代史に関するオーラル・ヒストリーの調査に携わっている。調査は主として、第二次大戦後を対象としているが、日本人である筆者が聞き取りを行う際、現地の人々から温かい協力を受けることが多い一方で、しばしば、1941年12月～1945年8月の日本軍による占領で肉親を殺されたり、迫害されたという老人に出会う。また、そうした直接的な経験がない世代からも、日本の戦争責任や歴史認識について厳しい質問を投げかけられる機会がある。元々中国現代史を専門とする筆者にとって、中国本土においても同様の経験をすることは多く、これに対してどのように応答すべきか、いまだにはっきりとした答え



図1 九一烈士記念碑 (遠景)

を出せていない難しい問題だ。

それはそれとして、一方で、マレーシアにおける日本占領の記憶は、そこで用いられるポキャブラリーなど、一見中国本土におけるものと似ているようにも見えるが、中国本土とは相当に異なる、戦後のマレーシア社会の独自のコンテキストが背景として刻み込まれている。ある記念碑の事例からこれを考えてみたい。

首都クアラルンプールとスグリ・スンビラン州の州都スレンバンを結ぶ高速道路沿いに、主として華人向けの霊園である孝恩園がある。この中に、「九一烈士記念碑」(図1)と「馬來亞抗日英雄紀念碑」という、2000年代に建設された比較的新しい2つの記念碑があり、筆者は2008年8月にここを訪れる機会を得た。

前者は、「九一烈士記念碑」とだけ書かれた石碑を中心に(図2)、その背後と両脇に黒い石版が置かれ、両脇の石版の後ろには、不ぞろいの石柱が18本立っている(図3)。記念碑の由来についての説明は一切なく、両脇の石版は、普通であればそうした内容が書いてありそうな位置にあるため、文字が刻まれていないという点が却って際立った印象を与える。後者は、そのすぐ近く



図2 九一烈士記念碑 (主碑)



図3 九一烈士記念碑 (主碑左脇の石版と石柱)



図5 馬來亞抗日英雄紀念碑碑文 (マレー語)



図4 馬來亞抗日英雄紀念碑碑文 (日本語)

にある三層構造からなる方柱で、基底部には「日本のマラヤ侵略に抵抗した英雄たちの碑・1941—1945」という文面が、日本語(図4)、マレー語(図5)、英語、タミル語の四言語が四面に刻まれている。

これらの記念碑について、2006年12月、マレーシアのザイヌディン情報相からマラヤ共産党関係者を記念しているとして批判があり、これを受けて、孝恩園が位置するスグリ・スンビラン州のモハマド・ハサン州首相が記念碑の撤去を要求するという事件が発生している。「九一烈士記念碑」の「九一」とは、1942年9月1日、クアラルンプール郊外のバトゥ・ケイブに集まったマラヤ抗日人民軍(その中心はマラヤ共産党)の幹部が、書記長ライ・テクの内通に導かれた日本軍の急襲を受け、18人の幹部が斬首に処された事件を指しているのだ。

マラヤ共産党は、日本占領下においてイギリス植民地当局と共闘関係にあったが、戦後は独立方式をめぐるこれと対立、武装闘争を行った。その対立は独立後のマレーシア政府との関係にも引き継がれ、1989年にマラヤ共産党が活動を停止し、和解が成立したものの、公然とその関係者を顕彰することは現在もタブーなのだ。

加えて、日本占領に関する記憶のあり方自体、マレー

人と華人ではかなりの温度差がある。日本軍による虐殺や迫害は主として華人(当時の呼び方では「華僑」)に向けられ、マラヤ共産党を中心とする抗日活動に携わった者にも華人が多かった。マレー人に対しては、日本はイギリス植民地下の民族集団間の分断統治を引き継ぎ、占領に利用した。このため、戦後の華人側の報復も加わり、民族集団間の分断はいつそう深刻なものとなる。こうした背景が、マラヤ共産党に対する「反共」には、しばしば反華人の意識が重ねられる。

記念碑をめぐる議論にもどらう。マレー系政府要人からの批判に対し、華人社会は党派を超えて猛反発し、結局記念碑の撤去は実現しなかった。しかしながら、この一件は、抗日の記憶が華人社会の公式の記憶として刻み込まれていることを示すと同時に、一方で、ストレートにそれを出してしまうことが、マレーシアの文脈においては多数派マレー人との間に摩擦を引き起こすリスクを伴っていることを改めて示す結果となった。抗日の歴史がそのまま中国共産党の政権獲得の歴史へとつながられる中国本土の公式的記憶とは、置かれた環境が大きく異なっていると言えるだろう。

「九一烈士記念碑」の石版の空白は、タブーの中で歴史的記憶を顕彰することの難しさを物語っている。しかし、この困難は同時に、四つの言語によって書かれたもう一つの記念碑に示されるような、痛ましい記憶を、華人という一族集団の枠を超えたより普遍的なコンテキストに開いていこうとする試みをも生み出した。後者の四つの言語の中には日本語も含まれている。加害者である日本人に対してさえも、記憶の共有の可能性が開かれているのだ。これに日本人はどう応えるのだろうか。

附記：写真は全て筆者による撮影(2008年8月)。



コラム 招聘レポート Column

2010年12月～2011年2月の期間に、海外提携機関より、4名の招聘研究者をお迎えいたしました。

名前	所属	招聘期間
張青仁	北京師範大学民俗学専攻 博士課程	2010年12月6日～12月26日
李莉薇	中山大学中国非物質文化遺産研究中心 博士課程	2010年11月1日～11月21日
福田忠之	浙江工商大学日本文化研究所 副教授	2010年11月1日～11月21日
姚美玲	華東師範大学对外漢語学院 副教授	2011年2月8日～2月21日

神社与日本民众生活



張青仁（北京師範大学）

一 研究意义

作为日本的国教，神道教与日本民众的生活息息相关。笔者拟对鹤岗八幡宫，濑户神社，镰仓宫，饭泉观音，寒川神社等地进行调查，探讨作为日本固有的宗教组织的神社在新旧年交替之际如何创造时间分界线并影响民众的日常生活，分析神道教对日本民众生活的意义，以期启发中国民间信仰的相关研究。

二 神社与民众生活

1 濑户神社“岁知式”

“岁知式”是日本神社年底的一个仪式，民众通常在这天将家中已供奉一年的神具拿到神社，等待神主在除夕之夜将其烧掉，同时也在这天购买下新的神神。“岁知式”当天，濑户神社的左侧早已设立了很多摊位，上面摆放着达摩，七福神等众多神具。顾客购买后手持七福神，店主面对顾客，在“呦呦哟”的声音中将硝石擦出火花，颇似中国的开光仪式。

2 鹤岗八幡宫的“月次祭”与“煤拂祭”

神社通常会每月举行固定的仪式称为“月次祭”，鹤岗八幡宫在每月的1日和15日都会举行月次祭。12月15日的月次祭是由八幡宫的不同等级的神主，神女们共同完成的。参与祭祀的神主包括等级最高身着白色和服的宫司，身着紫色金纹的祢宜、紫色银纹的权祢宜和黄色和服的出仕。神主，神女们从神主殿出来，先到左侧神社朝拜，完毕后再往主殿。神女在左侧持花伴奏，后到主殿持花献舞。拜殿内神主们叩首，神女表演完毕后，神主神女从左侧走出。

八幡宫还举行了“煤拂祭”，这一祭祀意在清除掉一年的污垢，常由神主完成。八幡宫的煤拂祭甚至吸引了东京电力公司的人员的参与，他们驾着云梯车，清扫着寺院屋顶的污垢。

3 濑户神社神主为氏子个人举行的仪式

12月15日下午，濑户神社的神主为一位氏子举行了仪式。氏子的儿子30多岁尚未成婚，她前往濑户神社请求神主帮助。神主和妇人进去拜殿，神主念经完毕后，拿起白色的幅条朝神位，妇人头上挥舞，然后放至原处。神主起身再去叩拜，并在中间跪下念经，念经完毕后拍手。此后他站立举动铃铛和绿旗在妇人头上来回伴动。仪式完毕后神主将一个白纸的神具给她，二人均在中间叩拜，击掌。等待妇人坐下后，神主将一个黑色方箱搬出后给妇人一个信封，妇人，神主依次走出拜殿，仪式结束。

4 神社里的绘马

绘马是民众献给神灵之物，大小不等，通常挂在神社外侧。绘马的正面写着民众的各种祝愿，背面书有神社的名称。神主通常在年底的时候，将一年的绘马统一烧尽，献给神灵。临近高考，上野附近的一座供奉智者的神社吸引了众多的民众前去朝拜，两旁的绘马更是堆积如山，写满了即将参加高考的学生对于自己美好的祝愿，辑录如下：

合格祈愿
希望优介能考中第一志愿的大学
瞳

合格祈愿
希望能东京大学理科一类考试合格！
西武大希

三 结论

与含蓄内敛的中国民间信仰对许愿私密性的强调不同，甚至强调许愿的私密性成为“灵验”的前提，日本神道教对主体性的诉求显现出更为开放的态度。在日本神社里，绘马上写满了诸多信众的请求，包括升学，祈求家人身体

健康，新年祝福之类，甚至在镰仓宫还有将个人身体健康的祝愿写在小人身上，而这与中国民间信仰中强调许愿的私密性大相径庭。笔者曾于2010年对冀中地区的三皇姑信仰进行调查，不少信众在受访时均表示不能将其所许的愿望说出，否则就不灵验了。

尽管在日本存在神佛之争，宗教信仰的合法地位始终得到认可，且神职人员的身份被主流社会接受。明治时期对神道系统建立是建立在对民间信仰吸收的基础之上，表明

日本政府对宗教作为权力文化网络的作用是认可的。相比之下，中国始终将民间信仰排除出去，对自身合法性的诉求成了中国民间信仰主要任务。在此背景下，也就出现了诸如范庄龙牌会被冠名为中国龙文化博物馆的滑稽剧，而找不到合法性的民间信仰场所之能如铁佛寺庙会一般消失于政府的推土机下。而在这一过程中，却忽视了民间信仰的基本作用。事实上，在一个越发刚性的社会中，民间信仰在民众生活中具有重大的意义。

二大演劇総合誌から見られる中国伝統演劇研究



李莉薇（中山大学）

一 はじめに

今回は、20世紀日本における京劇の受容というテーマで、中国伝統演劇、中日演劇交流に関する研究や報道について、『演芸画報』、『演劇博物館紀要』、『演劇論集』（演劇学会紀要）など演劇関係の雑誌、特に演劇総合類雑誌である『悲劇・喜劇』、『テアトロ』を中心に調査した。『悲劇・喜劇』の1947年10月の創刊号から、2010年6月号まで、合わせて716号、『テアトロ』の1934年5月の創刊号から、2010年10月号まで、合わせて839号を調べた。

二 二誌について

『悲劇・喜劇』誌は日本演劇関係の重要な雑誌の一つで、1947年秋（昭和22年10月1日）、早川書房により発行された。また、『テアトロ』も日本演劇関係に数えられる雑誌の一つであり、昭和9年5月創刊、秋田雨雀が初代編集者となった。戦争中、一時休刊となったが、

1946年10月号（8巻1月号）に月刊として復刊し、現在まで続けられている。

三 二誌から見られる中国伝統演劇研究の概況

『悲劇・喜劇』は40、50年代において、欧米の文芸思潮の影響を受けたからか、主に新劇の報道、評論を中心としていた。中国演劇関係についての内容はほとんど見られなかった。調査したところ、最初に中国演劇に関する報道は59年1月号で、中国演劇の舞台についての内容であった。60年代になって、京劇をはじめ、中国の演劇に関する紹介はあったが、ほんの少しだけであった。70年代中日国交回復の時から、中国伝統演劇に関する内容が次第に多くなってきた。80、90年代に入ってから、中国伝統演劇の報道は一段と多くなったし、中日演劇交流の新しい視点も見られるようになった。この時期において、『悲劇・喜劇』1997年8月号（NO562号）から、1998年11月号（NO577号）まで、12回にわたり有沢晶子が翻訳した回想文『梅蘭芳舞台生活四十年』が当誌に掲載されたことは90年代中日演劇交流の上で最も特筆すべきことだと言えよう。総じていえば、80、90年代以降すでに単なる紹介、報道にとどまらず、本格的な研究も見られてきた。

一方、『テアトロ』は『悲劇・喜劇』と比べて、比較的演劇交流を重視していると言えよう。創刊号から、「海の彼方」というコラムが設けられ、外国の演劇状況を紹介している。たとえば、創刊号に中国、朝鮮演劇の状況についての報道が見られる。また、1956年梅蘭芳の3回目の訪日公演前後、当誌も京劇の紹介に力を入れた。更に、中日国交が遮断されていた60年代においても、



『悲劇・喜劇』誌

『テアトロ』誌

京劇の現代化や革命京劇について評論や報道も数多くあった。72年の国交回復以来、中日の全面的な演劇交流が始まったと言えよう。京劇以外、越劇などの地方劇、昆劇、人形劇、話劇、雑技まで、幅広く紹介されていた。しかしながら、中国演劇研究というより、その大多数はただ紹介、披露したという段階にとどまっていると言わざるを得ない。

日中の石版画報に見る義和団事変 —『風俗画報』と『図画日報』—

四 まとめ

二誌を通して見れば、中国伝統演劇及び中日演劇交流というテーマは、日本演劇研究において主要研究ではないが、文化交流の一環としての中日演劇交流も中日両国の文化交流の発展とともに、重要視されてきたということが分かった。



福田 忠之 (浙江工商大学)

石版画報(リトグラフ)は、精緻な画像を大量に、しかも低コストで読者に供給できたことから、19世紀末から20世紀初頭にかけての日中両国において大流行した。この時期の日中の画報には東アジアで起きた戦争を描いたものが少なくない。その中でも、日本の『風俗画報』(東陽堂)が出した臨時増刊号「支那戦争図会」と中国の『図画日報』(上海環球社)の特集「庚子国恥紀念画」は、1900年の義和団事変を描いた画像史料として貴重である。

「支那戦争図会」は、『風俗画報』が刊行した日清戦争の特集号「征清図会」に続く日本の対外戦争を描いた第二弾であり、義和団事変の真っ最中である1900年8月から10月にかけて全三編が刊行されている。そこには日本兵の死をも恐れない突貫攻撃や戦死の場面を描いた絵図が多く掲載されているが、重要なことは『風俗画報』のこのような絵図の多くが、将兵自身の証言や新聞報道などをもとに「想像」によって描かれたものであるという点である。このような「想像」による突撃や戦死の場面が、読者の期待通りの絵柄、構図となり、共感を巻き起こし、視覚的に国民の記憶の中に刷り込まれていく。また「支那戦争図会」の中で、注目に値するのは、日本軍の「勇壯なる挙動」や「厳肅なる規律」が列国軍との共同軍事行動の中で、如何に諸列強に認められ高く評価されたか、という点に最大の関心が払われていることであろう。義和団事変が勃発した時、日本の指導者に提起されたのは自国民の保護という問題だけではなかった。列国と共に軍を派遣することにより、如何に日本の国威を列国に見せつけ、欧米列強の仲間入りを果たすかという課題が存在したのである。したがって、日本の国

家的要請としても、日本の遠征軍は義和団や清国兵を打ち負かすだけでなく、その卓越した戦功により列国軍から一目置かれる存在でなければならなかった。『風俗画報』が「今回の事変こそ、本国の威武を示すべき好機会なり」と述べる所以である。例えば、太沽砲台へ日本軍が突撃した際の模様を伝えた報道では「(英独兵など)我陸戦隊の大快挙を見何れも舌を捲て驚嘆せざるはなかりしも無理なし」として、列国の評価を常に気にしているし、また、天津占領後の情景を描いた絵図は、日本の軍紀のよさを知った天津市民が日本の国旗を手にとって入城を歓迎し、それを目撃した列国兵たちが「驚嘆」しているという構図になっている。このように、『風俗画報』は、国威発揚、国際的地位の向上という国家的要請を過敏に感知しつつ、それに対応する視覚的イメージを作り出し、読者の視線を満足させていったのである。

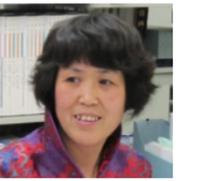
「支那戦争図会」が事変発生当時のほとんどリアルタイムの報道であるのに対して、『図画日報』の「庚子国恥紀念画」の方は事変終結の約9年後に描かれたものであり、1910年1月から4月にかけて、全79図が掲載されている。清末の画報で義和団事変を論じたものとしては、この「庚子国恥紀念画」が初めてである。義和団の発生から、李鴻章による和議交渉と「辛丑条約」の締結に至るまで、かなり詳細に記されており、これを一読すれば、義和団事変の全体的な経過は大体理解できる。その冒頭では、国家的恥辱の内実を民衆に知らしめ、民衆の愛国心の高揚を図ることが謳われている。そこで求められたのは民衆による国恥イメージの共有である。特徴的なのは、「辛丑条約」という屈辱的な敗戦条約を結ばされたこの事件を「国恥」として認識しながらも、そ

の批判の矛先を、中国を蹂躪した帝国主義に向けるのではなく、むしろ義和団の蛮行やその荒唐無稽な神秘主義の問題性に向けている点である。これは『図画日報』自体がその性格上、改良主義、啓蒙主義の立場に立っていたことに由来するものである。そこでは、義和団のような「迷信」的傾向を色濃く帯びた「蒙昧」な排外主義を生み出してしまう中国社会内部の後進性が問題にされているわけであり、その意味で、「庚子国恥紀念画」は単純な反帝国主義という立場からのみ描かれたものではない。

い。むしろ「国恥」としての義和団事変イメージの発信を通じて、清末宣統年間における民衆意識の改変と社会全体の改良を促そうとしたところに「庚子国恥紀念画」が掲載された理由があると考えられる。

「支那戦争図会」と「庚子国恥紀念画」には、義和団事変中の同一事件を描いたものが多く、比較検討を行うことも可能であると思われるが、この日中の画報がそれぞれ描く義和団事変像の異同については今後の研究で明らかにしていきたい。

敦煌卷子与日本奈良、平安抄本之比较



姚美玲 (華東師範大学)

为了解决敦煌研究中存在的问题，查阅更多的敦煌资料，2011年2月8日，我来到日本神奈川大学，在福田亚细男、大里浩秋和田上繁等教授的帮助下，完成了为期两周的学术访问，对敦煌卷子的文字现象有了新的认识。

敦煌卷子是指在中国甘肃省敦煌县莫高窟出土的4-11世纪多种文字的古写本。由于敦煌卷子呈现的文字现象与通行的繁体字系统不同，有许多异体字，因而学者提出了“敦煌俗字”的概念。

日本奈良，平安抄本，是以正仓院古文书为代表的日本奈良，平安时代的手抄本，包括写经，户籍，税帐等。公元7世纪至9世纪的奈良，平安时代，受中国盛唐文化的影响最大，汉字通行全日本国，目前所见到的正仓院古文书与敦煌卷子的文字形式完全相同。

将两类文献比较，我们得出以下结论：

(1) 中国敦煌卷子呈现的文字，与日本奈良，平安年代的抄本文字完全相同。两个国家并存的写本反映了唐代文

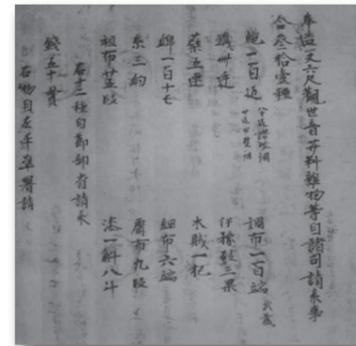
字的真实面貌。

(2) 中国敦煌卷子和与日本奈良，平安年代的抄本内容都十分丰富。但反映各自国家历史，宗教，文化和经济社会生活。

(3) 唐代以后，由于历史原因，两国文字朝着不同方向发展。在中国，唐代以后，政府不断规范文字，加上刻版印刷术的流行，形成了通行的繁体字系统。“敦煌俗字”在埋藏多年之后，一般人已经不能容易释读它们，从而引起了学者的重视，对其加以识读辨别。在日本，八世纪中叶后，汉字完全成了借字，奈良，平安时代的汉字有的保持原来的字形继续延续使用，有的字形经过改造后加以使用，有的就废止不用了，经过多次的整理和改革，形成了目前现行的1945个日语汉字。

(4) 通过这两类文献的研究，我们可以再讨论敦煌写本“俗字”的价值，讨论唐代文字“正”，“俗”，“通”的现象。也可以细致分析现代日语汉字的源流演变，探讨唐代汉字的形，音，义和现代日语汉字之间的关系。

(5) 如果能将敦煌古写本与日本奈良，平安年代的抄本结合起来研究唐代的语言文字和文化，得出的结论将会更加完善和可靠。同时，如果能就此研究进行国际合作，必将有益于深入研究敦煌学，唐代语言。



图一 正仓院古文书影印集成 正集 第五卷 12



图二 法藏敦煌文献之一 伯希和 2967 卷 15 礼服制度



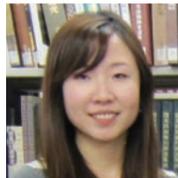
コラム 派遣レポート Column

2010年度は2名の学生を海外提携機関に派遣しました。

名前	派遣先	派遣期間
張 仲 霏	北京師範大学文学院民俗学与文化人類学研究所	2011年2月20日～3月11日
曹 起 虎	華東師範大学中国非物質文化遺產保護研究中心	2011年2月27日～3月18日

北京師範大学への派遣調査について —北京小蚂蚁皮影艺术团—

張 仲 霏 (外国語学研究科中国言語文化専攻 博士後期課程)



皮影戏既是一种历史悠久的表演艺术，又包含精湛的手工艺技术，凝聚着民间艺人的聪明才智，具有非常珍贵的艺术价值，文化价值和科学价值。文革期间，皮影戏被彻底禁止。后来，文革结束后，皮影获得新生。但是，近些年来，随着电视，广播，网络等各种传播工具的普及和快速发展，使得皮影这个传统艺术的观众锐减，加之艺人的经济收入不能随着经济的发展而提高，造成了艺人缺少从艺的积极性，导致皮影戏班越来越少，皮影面临着生存危机，已经到了失传甚至灭绝的境地。

近年来，文化部门把皮影戏列为非物质文化遗产保护工程的重点项目，对流散于民间的皮影进行征集，收藏，举办皮影演出，皮影艺术品展览等，对皮影艺术的保护和传承起到了良好的作用。

在北京有一个名气很大的皮影剧团：小蚂蚁袖珍人皮影剧团。这个剧团的团员平均身高只有1.2米，声音和长相都和5，6岁的儿童一样，但他们却拥有着和成年人一样的情感和智慧。路家班第六代传人路海是从艺30多年的老艺人，2008年的时候，为了帮助残疾人，他在全国招募袖珍人，随后成立了世界上第一个袖珍人皮影艺术团。现在该剧团更名为：小蚂蚁皮影剧团。团员一共有11个人，最小的19岁，最大的30岁。



皮影戏的传统曲目一般给人一种封建色彩浓，故事情节老套的印象。小蚂蚁皮影剧团摒弃了传统的老套观念，对传统曲目进行了大胆的创新和改编，比如幽默搞笑版的《梁山伯与祝英台》。另外，他们还会演出一些现在流行的小品，相声段子以及经典的电影片断，如《不差钱》，《卖拐》等。

根据演出时期的不同，演唱的曲目也会所有变化。比如，情人节的时候，一般是演唱《梁山伯与祝英台》，七夕的时候演唱《牛郎织女》，八月十五演唱《嫦娥奔月》，端午节的时候演唱《屈原》等。

当然，根据观众人群的不同，演唱曲目也会有所选择。针对老年人，一般演唱《穆桂英挂帅》，《天宫赐福》，《二郎探母》等传统老戏。针对年轻人或者小孩子，演唱《红孩儿》，《白雪公主》，《哪吒闹海》等符合受众需求的曲目。

小蚂蚁皮影剧团在皮影老艺人的帮助下，不仅靠自己的能力学会了唱皮影，还学会了做影人，而且对传统皮影还进行了不少改良。比如改良了头茬，使观众看起来更漂亮，更清晰；扩大了影窗，并且丰富了布景灯光。

虽然在多方的努力下，皮影戏在发展和传播方面已经取得了一些成果，但世代相传的皮影戏，今天的境地仍然不容乐观，不得不说这是很遗憾的。小蚂蚁皮影剧团就是在这样的一种局面下应运而生的，虽然现在的经营情况仍然不尽如人意，演员的收入很低，但他们还在坚持，也在力求寻找一条适合他们的生存之路。



上海における寺院や墓地の復興と死者供養



曹 起 虎 (歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程)

2011年2月17日から3月17日まで派遣研究員として上海の華東師範大学中国非物質文化遺產保護研究センターを訪問し、現地調査をする幸運に恵まれた。同センターでは、陣勤建氏をはじめとする姚美玲ら教授陣のご指導のもと、研究を行うことができた。当初予定したテーマは「現代中国の都市における寺院復興と共同墓苑における『死者供養』変容に関する研究」であったが、今回は「寺院復興」という視点を越え、幅広く「宗教復興」の角度からも共同墓苑や死者儀礼の変容について探ることにした。すなわち、仏教以外に儒教・道教といった他宗教にみられる死者供養についての研究も試みた。さらに、上海市内のカトリック・プロテスタント・イスラム教などにおける宗教行事にも参加して、それぞれの宗教行事を頻繁に見学することができた。

文化大革命(1966 - 1976)の後、1990年代に入ると、上海では経済的な発展にともなって静安寺・真如寺・玉仏禅寺・龍安寺など著名な寺院以外にも数え切れないほどの寺院が復興された。さらに、祖先崇拜や死者供養が数多くの宗教施設で行われるようになった。

訪問期間中、静安寺においては、仏教の祖先崇拜の儀式である「超度(『死者供養』の意味)」という行事(写真1)の様子を見ることができた。これに参加する信者は数えられないほどであり、今日の中国人にとって、「超度」がなおも重要な位置を占めていることが感じられた。この静安寺では、現地でチューターを務めてくださった黄景春氏の交渉により、同寺の法師・釈妙靈という方から説法を聞くことができた。このなかで、人生の儚さを実感した。

この数日後には、真如寺・留雲禅寺・玉仏禅寺で行われる寺院復興の現場を見学することもできた。ここでは、「超度」を通して、報本反始の大切さを感じながらお祈りをする仏教の信者たちの動きを目のあたりにした。また、これらの寺院には位牌がかなり多くあった。一般的には赤色の位牌は生者であり、黄色の位牌は死者を表すということであった。さらに沈香閣では、活甕に息づいている仏教の雰囲気が満喫できた。そこを訪ねた時、ちょうど多くの信者たちの参加のうち、仏教経典の読経が

行われた。ここでは月に何度も仏教経典の読経が行われ、筆者が訪ねた寺院の中では最も活発な仏教の雰囲気溢れていた。ここでは、比丘尼になりたいという20代の女性が5、6人いた。関係者によると、仏教経典の読経は祈りの性格とは別に、彼女たちの入信を祝うという性格ももっているということであった。

青浦の福寿墓苑では、一般の人々の墓と偉人たちの墓、キリスト教関係者の墓地がよく区分けされていたことにある種の違和感と驚きを感じずにはいられなかった。

一方、死者供養という宗教的な救済システムの現場ではないが、儒教・キリスト教の現場も見学することができた。イスラム教の清真寺・道教寺院の海上白雲閣と大境閣・董家渡天主教堂などがそれぞれである。とりわけ、董家渡天主教堂の場合は参加した日が日曜日であったため、夜のミサも見学できた。ここで驚いたのは、建物の歴史が古く夜のミサであるにもかかわらず、大勢の人が参加していたことである。ミサの最中は聖歌団員の活発な動きを見ることができ、建物の近所に故人となった信者たちの墓があるということを知ることができた。

上海では、以上のような有意義な研究を行うことができた。最後に、上海でお世話になった3人の教授と3人のチューターの方々に対する感謝の気持ちを表明したい。



写真1 静安寺の「超度」行事



横浜・神奈川大学日本常民文化研究所付設 非文字資料研究センターに期待すること

韓 東洙 (漢陽大学建築学部 教授)

1. はじめに

筆者は日本の横浜にある神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料¹研究センターで2010年3月から2011年2月まで、1年間日本語を習いながら、非文字資料に関する歴史研究をする機会を得た。2008年、漢陽大学建築学部の富井正憲先生の紹介で初めて非文字資料研究センターと接するようになった筆者は、日本に来る前、同センターの研究活動に間接的ながらも参加したことがある²。また、筆者の勤めている漢陽大学建築学部東アジア建築歴史研究室はこのセンターと学術シンポジウム³を共同開催した経験もある。非文字資料研究センター長であり、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科で民俗学を教えている福田アジオ教授、センターの主任研究員で、神奈川大学外国語学部中国語学科で中国語や東洋史を教えている大里浩秋教授、そして漢陽大学建築学部で建築設計と近代建築史を教えている富井正憲教授の力添えで、非文字資料研究センターに来訪することとなった筆者は、同センターにおいて経験したことを紹介することで、今後この分野に関心のある研究者が交流する場

となることを期待する。

2. 非文字資料研究センターの研究成果

非文字資料研究センターは2003年に始まった、神奈川大学の21世紀COEプログラム⁴「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に関する5年間の成果を継承・発展する組織で、2008年4月1日に発足し、1921年洪沢敬三(1896～1963)⁵によって設立され、以後神奈川大学へ移管された日本常民文化研究所⁶の付設研究機構の中の一つとなっている。発足後間もないため、まだ世界的な名声を得ているとは言えないが、現在このセンターで行われている「非文字資料の体系化」という研究主題と研究方法、そしてその研究結果は、新しい見方や考え方から始まった特化されたもので、韓国の研究者にも伝えられるべきものである。

非文字資料研究センターで今まで完成させた研究成果の中で、我々が注目すべきことを挙げると、図像文献書誌情報目録と生活絵引、そしてデータベースに構築された調査資料のウェブサービスなどがある。

(1)『図像文献書誌情報目録』及び『図像研究文献目録』

この2冊の目録は図像史料と関連した文献と研究成果を収集整理したものである。一般的に日本学界の最も良い点の一つが、充実した目録を作り出し関連研究者の研究に役立てられるように提供することであると言える。これも非文字資料の研究のために基本作業の一環として行われた成果である。『書誌情報』の場合、近現代に日本において再収録、復刻、翻刻、筆写等の方法により、公開のために印刷された文献の中で、絵画、絵図、地図等の図像のある文献を抽出し、図像名称、書名、成立年代、校注者、収録書、刊行年代、発行先、項数、文献種類、図像内容、図像分量(全体内容で図像が占める量の記録)、図像資料性(写真・漫画・実測図等の図像の性格の記録)、対象地域、形状(彩色の方法、大きさ等の記録)、所蔵先、収録対象情報(カラー・モノクロを区分して記録)、備考等の18項目に分けて作成している。『研究文献』は日本国内で1945年以後発表された非文

字資料関連の研究成果を、著者名、題名や書名、収録誌の巻数・号数・項数、発行先、発行年度、対象時代、分析対象の地域、対象作品、分析内容、備考等の11個の範疇に区分して作成された。なお作成された内容は、『書誌情報』の場合、図像名称別、図像製作編年別、図像内容分類別に、『研究文献』の場合は研究者別、刊行年代別、分析内容別にそれぞれ配列し目録化している。そして二つの目録共に、その対象に日本だけではなく朝鮮や中国、台湾まで含めてある⁷。したがってこの目録を通して日本国内にある韓日中の図像関連資料や研究成果が一目瞭然と分かる。

(2) 生活絵引

生活絵引⁸は非文字資料研究センターが日本常民文化研究所の先学たちの研究方法を継承し心血を注いで作り出した代表的な研究成果であり、最も重要な研究業績と言える。その内容について簡単に述べると、非文字資料すなわち一枚毎の図像資料に対して詳細な説明を付けることと、その資料に描かれた対象物や形状、行為等を示す用語とその索引⁹を併記する¹⁰。この編纂作業は特定の分野に限らず、図像の性格と範疇により関連分野の専門家が参加して進められたもので、おのずと学際的な共同研究が誘発された。

既に刊行された生活絵引の中では、非文字資料研究センターの主任研究員であり、神奈川大学で美術史を教えている金貞我准教授の主導のもとに編集された、韓国とも関係がある一冊に、『東アジア生活絵引 朝鮮風俗画編』がある。ここで扱っているのは「耕職風俗図屏風」、「檀園風俗画帖」、「平壤監司饗宴図」、「蕙園伝神帖」、「平生図」、「四季風俗図屏風」などで、用語索引は全て日本語と韓国語が併記してある。これとともに研究センターでは生活絵引の国際化のため、用語を韓国語、日本語、中国語、英語の4カ国語で翻訳した『マルチ言語版(Multi-Language Edition) 日本常民生活絵引』の作成にもとづく公開セミナーを開催したことがある¹¹。

(3) データベースを通じたウェブサービス

非文字資料研究センターでは21世紀COEプログラムの非文字資料研究の5年間の成果である9件のデータベースを再構築し、その一部をホームページに載せ国内外の研究者に提供している。そのなかで代表的なものとしては、①関東大震災・復興データベース、②海外神社に関するデータベース、③只見町インターネット・エコミュージアムがある。以下、それぞれデータベースの概要を紹介する。

①関東大震災・復興データベースの概要

このサイトでは、関東大震災の後に東京の復興作業で建てられた復興小学校の位置を地図(昭和57年の東京地形図)上に表示し、関連データや写真等が閲覧できるようになっている。関東大震災の当時、東京にあった196校の小学校の中で117校が崩壊・焼失し、災難児童が145,962人、災難学級が2,552カ所にのぼった。東京は小学校の復興に41,056千円を支援し、1923年から1930年までの7年間をかけて小学校の復興作業を進めた。その過程で完成した復興小学校は、先進的な設備を有し、斬新なデザインを取り入れて、都市計画学に基づいた建築計画等の優れた観点から建設されており、現在でも教育行政及び建築歴史的にも高い評価を受けている。

②海外神社に関するデータベースの概要

このサイトでは、戦前において日本がアジア太平洋地域に進出して、そこに建設した数多い海外神社を取り上げて、それが敗戦後60年という時間の経過とともにどのように変容しているかといった問題について、関連資料を追跡整理している。建設当時の全般的な実態把握を前提とするため、辻子実氏(『侵略神社』著者)から600余点の貴重な資料も譲り受けている。それに加え、非文字資料研究センターの調査チームが持続的に資料を収集してデータベースをグレードアップしている。特に植民地時代の京城に建てられた朝鮮神宮をはじめ、全国に分布する神社の過去と現在の姿を簡単な解説やイメージ資料を通して探ることができる。

③只見町インターネット・エコミュージアム

只見町インターネット・エコミュージアムは只見町という一つの地域にある自然・環境・社会・歴史・文化・民俗等、住民の生活に関わる情報を統合して体系的に見せることを目的として作成されている。現代のIT技術は“博物館と図書館を統合することを可能にした”と言われるように、多様かつ膨大な情報がその性格に応じて

1 ここに言及する非文字資料の範囲は地図・絵・写真等の視覚的なイメージ資料を含め、行為・音等を通じて伝わる資料まで、幅広く適用される。
2 筆者はこの研究センターのシンポジウムに討論者として2回参加しており、2008年の上海で開催した第4回公開研究会では仁川の清租界地について発表した。
3 この学術セミナーは2009年10月24日、“東アジア近代租界地の生活の論議”という主題で韓日中三国の学者が参加して、仁川で開催された。
4 21世紀COE(Center Of Excellence)プログラムは2001年6月に発表された大学構造改革の方針に基づき、文部科学省が主導する事業の一つである。研究費の集中支援を通して、日本の大学が世界最高水準の研究教育拠点を形成し、研究水準を高めると同時に世界を先導する創造的な人材の育成を図り、国際的に競争力を確保することで個性のある大学になることを目的としている。http://www.jsps.go.jp/j-21coe/index.html(日本学術振興会「21世紀COEプログラム」ホームページ)
5 東京帝国大学の経済学部出身で、日本財界の重要な人物でありながら民俗学者として、漁業史の研究に対する貢献だけでなく、民俗学研究者の育成や彼らの研究費や出版費、海外調査の経費などを積極的に支援した。第16代の日本銀行の総裁を歴任し、幣原内閣では財務大臣を務めて、日本の資本主義の父と呼ばれる渋沢栄一の孫でもある。著書としては「豆州内浦漁民資料」、「日本釣魚技術史少考」、「日本魚名集覧」、「塩俗問答集」などがある。
6 日本の民衆の生活・文化・歴史を調査分析する学術機関で、屋根裏博物館(Attic Museum Society)という私設博物館から始まり、第2次世界大戦の期間中に日本常民文化研究所に改名した。設立した以後、民具の収集と分類、古文書の収集と整理、漁業史の研究など、日本常民社会の多様な領域を扱ってきた。収集した資料は日本国立民族学博物館の所蔵資料の母体となり、日本常民文化研究所は神奈川大学に移管された。日本国内はもちろん世界的にも広く知られている民俗学の研究所の一つになり、今も歴史と民俗文化の学際的な共同研究だけでなく、社会に向けても幅広く交流の機会を提供すると同時に、関連分野に関する教育活動も並行している。

7 文献書誌情報目録には、韓国に関連した物は一つもないし、研究文献目録にだけ8編が収録されている。
8 「生活絵引」は英語で「Pictopedia of Everyday Life」と翻訳している。ここでPictopediaは絵を意味する「Picture」と百科事典を意味する「Encyclopedia」の合成語である。絵引という単語は40余年前に日本常民文化研究所が編纂した「絵巻物による日本常民生活絵引」で最初に使ったもので、文字を文字で説明する索引に対応して、絵を文字で説明することを意味する。
9 用語は可能な限り、その図像が画かれた当初のものを探して使う。
10 韓国でも「絵引」のような資料が朝鮮時代から作られた。それが「儀軌」である。筆者の勤めている漢陽大学建築学部東アジア建築歴史研究室では、これに注目し、図像資料が多い18世紀を中心とする「朝鮮時代生活絵引」を作るための準備をしており、華城陵行次屏風にある「鷺梁舟橋渡渉圖」を分析し粗雑でありながらも成果を出したことがある。
11 筆者もこのセミナーに参加し、専門用語の正確性、漢字に表記する時の略語の選択問題、英語翻訳時の発音表記の選択問題等を指摘したことがある。



さまざまな形態により記録され公開されている。例えば、自然や環境は写真により、歴史や社会は文字・書籍として、また民具や考古遺物は史料館・博物館の展示として、さらに芸能や民俗行事は写真・映像により、というように多様なメディアを使用して発信している。それはまた、資料と研究成果を結合することも可能にしている。地域における人々の生活は、研究対象として設定された事象に分解されモザイクのようにしてあるのではなく、それらの事象が渾然一体となった一つの総体としてある。そのように人々の渾然一体となった生活の全体を統合することで、より高度な体系的総合という段階を経て再構成し、発信することがインターネット・エコミュージアムの目的となっている。

そのような目的を達成するための作業を通して、当該地域に暮らす住民たちが自分の地域についての認識を深め、また研究者にも新しい問題を提起することになることを期待している。今はまだ国指定文化財となっている民具コレクションのデータベース化と民具情報の統合にとどまっているが、今後一層拡大し、内容の充実が図られることを期待する。

3. おわりに

世界には数多くの研究機関がある。その中には、あまり知られていないものも多い。また韓国の研究者にとってまったく関わりのないものも多い。それらの研究機関の中には、我々が今後、積極的に関係を結んでいかなければならない機関も多くある。ここに紹介した神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターも、そうした関係を結んで交流を図っていくべき重要な研究機関の一つであると考え。特に同研究センターが示唆する

以下の二つのことは、我々が共に考えていかなければならないことである。一つは非文字資料研究センターの誕生までの過程で、二つ目は研究方法と成果物の活用についてである。

前者の場合、研究プロジェクトに参加した研究者について、研究終了と共に解散させるのではなく、それを基盤として持続的な研究が可能となるように組織化し、同研究センターに定着させることである。我々の周辺でも数多い研究プロジェクトが進められており、学問間の多様な融合を通して優れた研究陣を組織するが、残念ながらその大部分は研究終了と共になくなってしまうのが現状である。研究責任者や参加者がさらなる前進を求めるべきだと思われる。そうなれば、我々の周辺にも多様な先端的な研究センターが生まれてくるのではないか。

後者の場合、非文字資料研究センターの重要業績である絵引の編纂作業は、現存する古建築が少ない韓国の状況においては、価値ある研究主題になるとと思われる。この研究を通して、専門用語の定着、イメージ資料の発掘をおこなうことができる。そして、研究成果を単なる報告書や論文として発表するだけでなく、様々なルートを通して発信し活用し供することが重要である。もちろん最近ではIT技術の進展によりその可能性が増えているが、さらに多様な方法を開発する必要がある。その中で注目すべきものは一状況により異なるが一、研究費を編成する時に、あらかじめ研究成果物を出版する経費を計上しておくことである。日本で様々な研究成果を刊行できる背景には、そうした予算編成のあり方があるといえる。おわりに韓国の研究者と研究機関には、非文字資料研究センターを活用することで、多様な研究の機会と方法を導出することを期待するものである。

本稿は、本センターの2010年度外国人研究員・韓東洙（漢陽大学建築学部教授）が『大韓建築学会誌2010年10月号』に掲載した本センターの紹介記事を、著者の了解を得て要約・翻訳したものである。

2011年度 センター研究員・研究協力者

センター研究員

名前	所属部局	職名	研究班
田上 繁 (センター長)	歴史民俗資料科学研究科	教授	1,4
大里 浩秋 (副センター長/運営委員 (研究会担当))	外国語学研究所中国言語文化専攻	教授	2
内田 青蔵 (副センター長/運営委員 (国際交流担当))	工学研究科建築学専攻	教授	2
安室 知 (事務局長/運営委員 (事務総括担当))	歴史民俗資料科学研究科	教授	4
鳥越 輝昭 (運営委員 (国際交流担当))	外国語学研究所欧米言語文化専攻	教授	1C
小熊 誠	歴史民俗資料科学研究科	教授	1B
木下 宏揚	工学研究科電気電子情報工学専攻	教授	5
熊谷 謙介	外国語学部国際文化交流学科	助教	1C
小松原 由理	外国語学部国際文化交流学科	助教	1C
佐野 賢治	歴史民俗資料科学研究科	教授	5
鈴木 一弘	工学部電気電子情報工学科	特別助教	5
泉水 英計	経営学部国際経営学科	准教授	3
孫 安石	外国語学研究所中国言語文化専攻	教授	2
津田 良樹	工学部建築学科	助教	3
能登 正人	工学研究科電気電子情報工学専攻	准教授	5
ジョン・ボチャラリ	歴史民俗資料科学研究科	非常勤講師	1A
	東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻	教授	
松澤 和光	工学研究科電気電子情報工学専攻	教授	5
村井 寛志	外国語学研究所中国言語文化専攻	准教授	2
森 武麿	歴史民俗資料科学研究科	教授	4
クリスチャン・ラットクリフ	外国語学部国際文化交流学科	准教授	1A
渡辺 美季	外国語学部国際文化交流学科	助教	1B

研究協力者

稲宮 康人		写真家	3
金子 展也	株式会社日立ハイテクトレーディング		3
何 彬	首都大学東京	教授	1A
吉川 良和	外国語学部中国語学科	非常勤講師	2
君 康道	東京大学大学院総合文化研究科	講師	1A
小松 大介	歴史民俗資料科学研究科	博士後期課程	5
辻子 実	日本キリスト教協議会靖国神社問題委員会	委員長	3
徐 東千	東京大学大学院工学系研究科建築学専攻	博士後期課程	1A
田名 真之	沖縄国際大学総合文化学部	教授	1B
常光 徹	国立歴史民俗博物館	教授	4
得能 壽美	法政大学沖縄文化研究所	特別研究員	1B
富井 正憲	漢陽大学校建築大学	教授	2
富澤 達三	外国語学部国際文化交流学科	非常勤講師	1B
中井 真木	東京大学大学院総合文化研究科	博士課程	1A
藤川 美代子	歴史民俗資料科学研究科	博士後期課程	4
山本 志乃	旅の文化研究所	主任研究員	4
李 利	歴史民俗資料科学研究科	博士後期課程	1A
フレデリック・ルシーニュ	歴史民俗資料科学研究科	博士後期課程	5

研究班：1 生活絵引編纂共同研究
 A 「マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引」編纂共同研究
 B 「日本近世生活絵引」南島編纂共同研究
 C 「ヨーロッパ近代生活絵引」編纂共同研究
 2 東アジアの租界とメディア空間
 3 海外神社跡地から見た景観の持続と変容
 4 水辺の生活環境史
 5 非文字資料の効率的な検索と安全な流通



2011年度 個人研究課題一覧

氏名	研究課題
田上 繁	非文字資料としての近世検地絵図の収集と解析
大里 浩秋	戦前台湾在住日本人関係資料整理
内田 青蔵	戦前期の横浜居留地に関する非文字資料の収集と分析
安室 知	海浜微地形の認識と環境利用に関する研究
鳥越 輝昭	非文字資料に見る表象史
小熊 誠	東シナ海海域地域における非文字資料の比較研究
木下 宏揚	非文字資料の著作権管理に関する研究
熊谷 謙介	フランス視覚資料における祝祭
小松原 由理	非文字資料としてのドイツ前衛芸術の分析
佐野 賢治	民俗資料の文化資源化
鈴木 一弘	非文字資料の著作権管理に関する研究
泉水 英計	戦後初期沖縄における米国軍政とその広報活動
孫 安石	中国都市史研究—とくに上海を中心に
津田 良樹	民家・集落の史的・地理的研究
能登 正人	非文字情報の収集と解析
ジョン・ボチャリ	絵巻と民間信仰
松澤 和光	非文字資料の検索法に関する研究
村井 寛志	戦後香港メディア史
森 武麿	オーラルヒストリーの可能性—戦後体験を語る—
クリスチャン・ラットクリフ	中世における和歌の社会的価値と効用
渡辺 美季	琉球史に関わる非文字資料の収集と分析

2011年度 奨励研究者決定

研究課題	氏名(所属)
中国漁村女性についての民俗	于 洋 (歴史民俗資料学研究所博士後期課程)
現代中国の社会変化期における水上居民の暮らし	藤川 美代子 (歴史民俗資料学研究所博士後期課程)
地蔵の民間信仰にみる地域性の特徴について	近石 哲 (歴史民俗資料学研究所博士前期課程)
中国大陸と台湾の空間認知に関する意識調査	鈴木 進一 (外国語学研究所中国言語文化専攻博士後期課程)
タコ穴漁からみた日本の地域利用の特徴	新垣 夢乃 (歴史民俗資料学研究所博士前期課程)

神奈川大学 21世紀 COEプログラム刊行物の復刻版のお知らせ

2003～2007年度の5年間に実施した神奈川大学 21世紀 COE プログラムは、その研究成果を調査研究資料・研究成果報告書等として刊行してまいりました。しかし、一部の刊行物について残部が僅少となりましたので、特に入手要望の高い下記4点を復刻刊行いたしました。

- 1 日本近世・近代生活絵引 北海道編
- 2 日本近世・近代生活絵引 北陸編
- 3 日本近世・近代生活絵引 東海道編
- 4 環境と景観の資料化と体系化にむけて

ご購入希望の場合は、非文字資料研究センターの刊行物のホームページ (<http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/publication/>) より、申し込み用紙をダウンロードできます。

主な研究活動

運営委員会

2010年度		
第9回	12月17日	2010年度海外提携機関への派遣研究員のガイダンスについて、2010年度海外提携機関からの訪問研究員の受入れについて、研究担当者(2011年度～)の更新について
第10回	1月19日	2010年度予算(残額等)の取扱いについて、2010年度事業報告書・2011年度事業計画書の策定について、第二期共同研究体制の編成について
第11回	2月2日	2011年度訪問研究員(フランス国立高等研究院東アジア文明研究センター)について、租界班研究成果の中国語出版契約書について
第12回	3月2日	2011年度研究体制について、センター規程の改正について、元研究員の施設利用等について
2011年度		
第1回	4月22日	2011年度研究員人事について、2011年度予算(配分)について、2011年度海外提携機関との学术交流について、2011年度奨励研究募集要項について、「ニューズレター」No.26の編集方針について、「センター要覧」2011-2013年度版の編集方針について
第2回	5月25日	2011年度奨励研究審査について、2011年度研究員人事について、2011年度海外提携機関への派遣募集要項および派遣計画について

研究員会議

2010年度		
第6回	12月15日	次期センター長の選出について
第7回	2月2日	2010年度事業報告について、2011年度事業計画について
第8回	3月23日	2011年非文字資料研究センター第二期研究体制について、センター規程の改正について、元研究員の施設利用等について
2011年度		
第1回	4月22日	2011年度研究員人事について、2011年度予算(配分)について
第2回	5月25日	2011年度研究員人事について

2010年度研究会

研究班

非文字資料研究ネットワーク形成研究・研究会 11月24日、12月24日、2月7日、2月21日
『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂研究・研究会 12月1日、15日、1月12日、2月9日、3月20日
関東大震災の都市復興過程とそのデータベース化共同研究・研究会 11月1日、2日、20日、29日、12月2日、9日、1月17日、24日、2月10日、14日、24日、3月7日、23日、28日
中国・韓国の旧日本租界研究・研究会 11月25日
持続と変容の実態の研究 —対馬60年を事例として研究・研究会 3月5日、6日、12日、13日

2011年度研究会

研究班

『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂研究・研究会 4月27日
『日本近世生活絵引』南島編編纂研究・研究会 4月27日、6月6日
『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究 4月27日
東アジアの租界とメディア空間 6月3日

現地調査

調査テーマ	日程	場所	調査メンバー
持続と変容の実態の研究 —対馬60年を事例として	2月24日～27日	対馬	橘川俊忠、津田良樹
関東大震災の都市復興過程とそのデータベース化、並びに資料収集	2月27日～28日	岐阜	北原糸子、高野宏康
	1月14日～16日	盛岡	北原糸子
中国・韓国の旧日本租界	3月28日～30日	上海	大里浩秋

神奈川大学歴史調査報告第11集 成島の民俗—高度経済成長とムラの変貌—

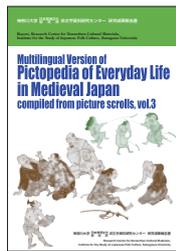
- 2011年3月31日発行 A4判142ページ
- 発行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所
- 内容：山形県米沢市広幡町成島で行われた2009年度民俗調査実習の報告。農業から祭礼までの民俗の変貌を、高度経済成長期の前後を比較しながら6章構成で描く。

神奈川大学歴史調査報告第12集 中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼 文献に関する報告 I

- 2011年3月31日発行
- 発行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所
- 内容：本報告書では、中国湖南省藍山県ヤオ族の儀礼と文献の総合的研究を目指し、2008年に実施した度戒儀礼の程序及び儀礼中に使用されたテキストの目録を作成し、さらに複数のテキストの翻刻を比較対照できるように掲載した。

マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引 第3巻

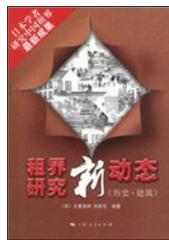
- 2011年3月31日発行
- 発行：非文字資料研究センター
- 内容：『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻のうち、21世紀COEプログラムにおいて刊行したVol.1/Vol.2に引き続き、本センターの第一期個別共同研究・第1班の研究成果としてVol.3を刊行しました。



お問い合わせは非文字資料研究センター
TEL:045-481-5661(内線 3532)

租界研究新動態 (歴史・建築)

- 2011年6月30日発行
- 発行：上海人民出版社 (大里浩秋・孫安石編)
- 内容：本センターの第一期個別共同研究・第3班「中国・韓国の旧日本租界」の研究結果。本紙5ページ(研究班紹介『第2班 東アジアの租界とメディア空間』でも紹介)。



お問い合わせは非文字資料研究センター
TEL:045-481-5661(内線 3532)

第15回常民文化研究講座 オーラルヒストリーの可能性—歴史学と民俗学との対話— —沖縄戦から祖国復帰へ—

日時：2011年10月29日(土) 10:30～17:30
場所：神奈川大学横浜キャンパス1号館8階804会議室

- 基調報告
中村政則 沖縄戦と民衆
石原昌家 沖縄戦・米軍占領と証言—オーラルヒストリーの経験—
- 各論 —沖縄戦から祖国復帰へ—
安田常雄 沖縄復帰と反復帰—川満信—のオーラルヒストリー
小熊 誠 戦後綱引行事の消滅と復興—沖縄県宜野湾市の事例から—
泉水英計 コンタクト・ゾーンとしての占領地
—アメリカ人にとって沖縄軍政の経験とは何であったのか—

主催：神奈川大学日本常民文化研究所

※報告のテーマは変更することがあります。

お問い合わせは、日本常民文化研究所
TEL:045-481-5661(内線 4358)

神奈川大学国際常民文化研究機構 第3回 国際シンポジウム 「カラダ」が語る人類文化—形質から文化まで—

日時：(1日目) 2011年12月10日(土) 10:00～17:00
(2日目) 2011年12月11日(日) 10:00～17:10
場所：神奈川大学横浜キャンパス16号館レストホール

- 第一日目：I 国際シンポジウム
「非文字資料としての身体^{からだ} —“カラダ”で読む・伝える・表す—」
- 第二日目：II アジア祭祀芸能の比較研究班公開研究会
「海の民俗伝承と祭祀儀礼 —船による神の来往と身体表現—」

主催：神奈川大学国際常民文化研究機構・神奈川大学日本常民文化研究所

※タイトルは変更することがあります。

お問い合わせは、日本常民文化研究所
TEL:045-481-5661(内線 4358)

編集後記

ニューズレターは、26号より若干のリニューアルをしました。総頁カラー刷りとしています。非文字資料研究センターは、2010年度で第1期3年の研究期間を終え、4月からは第2期に入りました。センター長や研究員の大幅な入れ替えがなされ、新たな顔ぶれで第2期が出發しました。2010年度まではCOEの継承が大きな課題でしたが、第2期はCOEと直接関わりを持たない人たちがセンターの運営や研究の中心を担うことになり、良い意味でCOEからの脱却が図られなくてはなりません。当分模索は続きますが、本ニューズレターでは速報性をもって模索するプロセスをお伝えできればと考えています。なお、表紙の写真は、さまざまな形態のウケ(陥穽漁具)4点です。日本常民文化研究所の前身、アチック・ミュージアムの民具研究はウケに始まっており、その意味で日本における民具研究、非文字資料研究の出発点となるものです。

非文字資料研究 No.26

発行日 2011年7月25日発行

編集・発行 神奈川大学 非文字資料研究センター
日本常民文化研究所

Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

■Tel.045-481-5661 ■Fax.045-491-0659 ■URL <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

